第３学年　総合的な学習の時間　学習指導案

奈良教育大学附属中学校　教諭　佐竹　靖

１．単元名　「熊本修学旅行（オンライン水俣ツアー）～水俣のひととの出会いから生き方を学ぶ～」

２．単元の目標

・水俣の歴史や文化、自然について多様な視点から知る。また、水俣病が現在も続く問題であり、水俣病が発生した社会的な背景や自然のしくみ、差別や偏見が生じた構図を理解する。（知識・技能）
・水俣の人の生き方や語り、地域との向き合い方を学ぶことを通して、自らの見方や考え方を変容させ、これからの生き方について考える。（思考・判断・表現）
・水俣の問題を身近な問題として捉え、自らの生活に引き寄せて考え、問いを持つ。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（１）教材観

コロナ禍をめぐっては、全国で差別や偏見の問題が顕在化し、今の子どもたちがこれから優しい社会を創っていくためには、公害経験から地域の再生に取り組んできた水俣から多くのことが学べるに違いないと考えた。

水俣病は過去の出来事ではなく、現在も症状を抱えながら生きる人がいること、地元の人が地元を語ることには、今日もまだ困難な状況がある。（例えば，永野，2018）。そして、水俣に向けられ、水俣の中でも生じた偏見や差別、分断の構図（原田，1972，1985，2007）は、例えば福島の原発事故で起きている問題や、コロナ禍で医療従事者や感染者家族へ向けられた差別や偏見など、現在も身近に存在する。

また、吉本哲郎の地元学の実践（吉本，2008）があるように、水俣では公害経験からの再生に向けて、水俣をフィールドとして様々な取り組みが行われている。例えば、水俣病が食品を通じて発生したことから、無農薬の茶、柑橘類の栽培など、食の安全や自然環境との関わり方について、考えを持って実践している人がいる。さらには、水俣病の語り部として、想いを伝え続けている人がいる。

従って、修学旅行※を水俣をフィールドとして実施し、水俣の人の生き方や語り、地域との向き合い方から学ぶことは、生徒の価値観の変容や自らの生き方の問い直しを促すのではないかと考える。さらに、生き方の問い直しの結果、生徒が内発的に地域社会の問題や環境問題に、多様な視点から関わる力を養えるのではないかと考える。これは、ESD の教育実践で重視される、価値観の変容や行動化につながる学びである。

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、実際はオンライン水俣ツアーとして実施した。

（２）生徒観

生徒は、水俣病について、小学校の社会科や中学校の保健体育、社会科などで学習する機会がある。従って、水俣病がイタイイタイ病や四日市喘息と並ぶ四大公害病であることや、公害が起きた社会的背景などを学んでいる。しかし、現在も続いている問題であることの認識や、今日的な社会問題との共通性や命との向き合い方の次元では深く考察されていない。さらに、現在の水俣の自然の美しさや歴史・文化的

な側面については学んでいない。

また、差別や偏見の問題は、生徒にとって身近であり、昨今のコロナ禍で見えてきた差別や偏見などからも、関心は高く、自分事に置き換えて考えやすい問題であると推察される。

（３）指導観

従って指導にあたっては、まず熊本県の歴史や文化、自然に関する学習から進め、水俣病センター相思社の永野三智さんのオンライン講話で、水俣病の歴史や現状について概要を理解させる。次に、様々な立場で水俣に関わっている人の生き方から学ぶ。さらに、水俣を世界に発信した写真家ユージン・スミスの妻であるアイリーン・美緒子・スミスさんの講演会を実施し、水俣病裁判での経験や環境活動家としての経験を語ってもらうことによって、自分たちに何ができるか突き詰めて考える機会をつくる。このように、段階的に学習を進めることや、ある一面から水俣を捉えるのではなく、多様な視点から水俣について学ぶことを重視する。また、人と出会い、その人の語りや生き方、地域との向き合い方を目の当たりにすることで、生徒の価値観の変容や生き方の問い直しを促す。

（４）ESD との関連

◯本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）

・相互性：水俣病は、魚介を食べるという生きるための営みを通じて発生したため、人間が自然とつながることで命が保たれているということ。

・公平性：水俣病からは、高度経済成長の成長を優先したがために、そのしわ寄せが一部の地域や人が背負わされているということ。そして、地域住民の分断や、水俣病患者に対する偏見や差別が生まれたこと。これらの犠牲や、水俣病裁判や患者らの運動があって、現在の環境や生活があること。

・責任性：水俣病の問題を、現在の問題に当てはめて考えることで、自分の行動が周囲の人や将来の社会にどのような影響があるかについて考えられること。

◯本学習で育てたいＥＳＤの資質・能力

・批判的に考える力：水俣について、多様な視点から深く知ることによって新たに見えてくる物事があり、真実が何かを見極めようとすることができる。

・多面的・総合的に考える力：多様な立場の人の語りから、多面的に物事を知ることで新たな見方・考え方が得られる。さらに、それらをもとに生き方について考えることができる。

・つながりを尊重する態度：人間と自然のつながりや、過去の人の営みと現在の自分、未来の人とのつながりを意識して、生き方を考えようとすることができる。

・進んで参加する態度：今の自分に何ができるか、これからどのような生き方をしていけばよいか、考えようとすることができる。

◯本学習で変容を促すＥＳＤの価値観

・人権・文化の尊重：偏見や差別は、知らないことから生じることがある。地域や相手のことをよく知ることが大切である。

・世代内・世代間の公正：一部の人や世代が豊かさを享受し、そのしわ寄せを一部の人や次世代に背負わせてはならない。

・自然環境や生態系保全を重視する：人間と自然は切り離されたものではなく、自然の営みがないと人間は生きていけない。

◯関連するＳＤＧｓの目標

目標１１「持続可能な都市・まちづくり」、目標１２「持続可能な生産と消費」:

水俣は、差別・偏見や地域のネガティブなイメージがある中で、安心・安全で、環境に配慮した持続可能なまちづくりや食品づくりに取り組んでいる。

目標１４「海洋資源・海の豊かさ」、目標１５「陸上資源・陸の豊かさ」:

水俣病によって一時は失われた不知火海の豊かな漁業資源であったが、海の豊かさは山からつくるという発想の取り組みなどから、海の豊かさを回復・持続させようとしている。

４．単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①熊本や水俣の歴史や文化、自然について多様な視点から理解できる。 ②水俣病が現在も続く問題であり、水俣病が発生した社会的な背景や自然のしくみ、差別や偏見が生じた構図を理解できる。	①水俣の人の生き方や語り、地域との向き合い方を学ぶことを通して、自らの見方や考え方をふり返り、これからの生き方について考えることができる。	①水俣の問題を身近な問題として捉え、自らの生活に引き寄せて考え、問いを持とうとすることができる。

５．展開の概要

（１）学習過程（全１２時間）

主な学習活動	学習への支援・留意点	◇ＥＳＤの視点 ◯ESD の資質能力	評価
１．事前学習１「熊本修学旅行のねらいを知り、熊本を知ろう」（１，２時間目） ・ねらいの説明 ・旅行日程の説明 ・熊本の地理と見所調べ ・NHK ブラタモリの視聴 「「火の国」熊本は「水の国」?」	・ねらいについては、オンラインで各教室を結んで、担当から説明を行う。 ・地図帳や旅行パンフレットを参考にさせる。		ア①．熊本や水俣の歴史や文化、自然について多様な視点から理解できているか
２．事前学習２「水俣について知ろう」（３，４時間目） ・映像の視聴① 「テレビ熊本　水俣病公式確認 65 年ユージン・スミスの妻、アイリーン氏が 9 月公開の映画への思い語る」 ・映像の視聴② 「ANN NEWS MINAMATA～ユージン・スミスの遺志～」	・映像の他に、「知る水俣病」朝日新聞を配布して、水俣病の概要説明を行う。		ア②．水俣病について、その概要を理解できているか
３．事前学習３「奈良の歴史や文化と水銀のつながり」（５時間目） ・水銀の利用について歴史的・文化的切り口から説明を行う。			ア①．奈良と水俣を、水銀を鍵にして繋がりを理解できているか
４．オンライン水俣講演会「水俣について知り、考え	・「水俣病 10 の知識」を参考にさせる。	◇相互性，公平性 ◯多面的・総合的に考	ア②．水俣病が現在も続く問題であり、水俣

る」（6，７時間目） 講師：水俣病センター相思社 永野三智		える力 〇批判的に考える力	病が発生した社会的な背景や自然のしくみ、差別や偏見が生じた構図を理解できているか ウ①．水俣の問題を身近な問題として捉え、自らの生活に引き寄せて考えようとしているか
５．コース発表（８時間目） ・出会う人と学べる内容を紹介し、誰に会うかを決める。	・コース一覧を参考に、希望調査を行う。		ウ①．学びたいことを言語化し、コース選びができているか
６．水俣レポートの作成（夏休み） ・関心を惹くテーマについて調べレポートにまとめる。	・図解水俣病　水俣病歴史考証館展示図録（水俣病センター相思社）を参考にさせる。		ア②．水俣病について掘り下げて調べているか
７．オンライン水俣ツアー（９，10 時間目） ・A～E コースに分かれ、オンラインで講演を聞く。	・取り寄せできるものについては、取り寄せて試食や学習に使う。	◇相互性，公平性 〇多面的・総合的に考える力 〇進んで参加する態度 〇つながりを尊重する態度	イ①．水俣の人の生き方や語り、地域との向き合い方からを、自らの見方や考え方をふり返り、これからの生き方について考えられているか。
８．アイリーン・美緒子・スミス氏講演会 （11，12 時間目）	・オンラインで各教室を結んで講演を行い、質疑応答はアイリーンさんに各教室を巡回してもらう。	◇公平性，責任性 〇多面的・総合的に考える力 〇批判的に考える力 〇進んで参加する態度	

（２）オンライン水俣ツアーのコース別講演の概要

コース	講師	講演の内容（筆者が要約）
A・D：ディープ水俣	杉本肇氏	①自己紹介 ・杉本家の歴史や、無添加のいりこ、柑橘類の無農薬栽培について。 ②水俣病について ・水俣病の原因や、人や動物に起きたこと。 ③家族の発病と差別 ・祖母の発病とともに始まった、杉本家への差別。 ・母親も水俣病であったが、水俣病のつらさよりも差別の方がつらかったと訴えていたこと。 ④小学校の時の記憶 ・第一次訴訟の始まりと、祖父の死。両親の入院と、長男として家族を支えた日々。 ・弱い立場でも勇気を出して声を上げると、人の支援があり、助け合いながら人が人を救っていく歴史が水俣にあった。 ⑤第一次訴訟の決着 ⑥漁師の自然や命と向き合う姿から学んだこと ・母や漁師から、自然に救われたという言葉をよく聞く。 ・母が恨むことをやめ、あるときチッソを許す、その背景にある県も国も許すと言った。 ・物事や自然に対して謙虚にならないと魚は捕れないし、そこまで精神を持っていかないといけないのが漁師。 ・母が、自分を律してくれた水俣病を「のさり」であると表現した。 ⑦これからについて ・漁をやっていきたい。自分だけの話ではなく、他者からも話を聞き、伝えていきたい。 ・第一次訴訟の家族や今患者として苦しんでいる人、当時の学校の先生とかに話を聞いている。 ・聞く話の共通点として、水俣の風景が自分を救ってくれたという言葉がよく出てくる。 ・子どもの時に、水俣病が世界に発信される際は、全部モノクロであり、悲劇だけを伝えることが疑問だった。 ・各地で講演するが、かつて水俣から発信されたモノクロの映像から発展していない。今の水俣を見て欲しい。 ⑧質疑応答 ⑨水俣の風景をライブ配信

B:持続可能な農業と畜産	天野浩氏 農山春香氏 農山文康氏 永野三智氏	＜天野氏＞ ①自己紹介 ・天野製茶園「森と種とお茶」というテーマで活動している。環境マイスターにも認定され、循環型農業をしている。 ②水でつながる水俣 ・水俣は、山から海までが一つの川の流域で、水の循環が繋いでいる。 ・水俣病の大きな出来事があったときに、水の循環を中心に再生することになった。 ③自然の森 ・色々な木が生えているのが元々の山であり、多様な森で安定した森をどう作るかがテーマである。 ・種から森を育てていて、種子の交換会をしている。地域で穫れるもの使って、森でお茶会をすることもある。 ・天の製茶園は、種から育てた樹齢 100 年に近い茶の木で製茶し、紅茶を主につくっている。 ④水俣で茶をつくるということ ・水俣は公害病を経験していて、繰り返さないという思いでつくっている。 ・経験したことがないことと向き合う地域は、限られた範囲で考えるのではなく、飛び出して考えることが大事。 ＜農山氏＞ ⑤自己紹介 ・水俣市から車で 15 分ほどの山の中で、養豚、加工から販売及び飲食店経営までを行なっている。 ⑥森づくりと養豚 ・「山を育てるために豚を飼う」が、経営理念。 ・山を手入れし、豚の糞尿を堆肥化して山を育てている。 ・山を育てるとミネラル豊富な地下水と澄んだ空気が生み出され、養豚で生じる CO_2 も吸収してくれる。 ⑦天野氏と農山氏の対談 ・新しいことを展開していく「つきぬける」ということについて。 ・お互いを近くで見ていて真似したいことについて。 ・今後目指すところについて。 ⑧質疑応答
C:写真家ユージン・スミスの足跡を辿る	豊田有希氏	①自己紹介 ・水俣でドキュメンタリー写真を撮影している。2015 年に水俣市に引っ越し、芦北町の黒岩地区に通って取材している。 ②写真を初めてから今までの経緯 ・一度は別の道に進みかけたが、独学で写真を始めた。 ・産業遺産、廃墟が好きで撮影しており、ギャラリーで三人展を行ったが、当時はビジュアル重視で中身がなかった。 ・いろんな情報や感情を読み取るという、写真を読む感覚を学んだ。 ・父親の癌をきっかけに、父の闘病の一年半を撮影し、写真に対する自分の姿勢、本質を考える経験をした。 ・ドキュメンタリー写真という分野を知り、ネパールで撮影を行うが、 ・「よその土地の出来事」を撮る意味がわからなくなった。年に数回の訪問では、物事の本質を見られない。 ・「山間、半数に水俣病症状」という、黒岩地区についての新聞記事と出会った。 ・黒岩地区に行ったが、水俣からは遠く離れており、第一印象は普通の山間集落で、水俣病と結び付かなかった。 ・黒岩地区の大半は慢性型水俣病の方々。見た目にはわからないが、話の端々に痛みのことが出てくる。 ・水俣病を知らない中で、写真を撮ることにすごく悩み、「撮られる者の痛み」「撮るという行為の暴力性」を考えた。 ・相手の思いを自分と重ねることで、写真をどう撮るか考えるようになり、撮影を始めて 5 年目に撮影を許された。 ③質疑応答
E:よかたい先生ゆかりの人から話を聞く	川本愛一郎氏	①自己紹介 ・父親の紹介。優しいが、悪いことは許さない勇気を持っている。 ・市の資料館で語り部をしている。作業療法士、言語聴覚士という仕事をしている。 ②水俣について ・海と山などの自然の豊かさ、魚の豊かさ、暮らしについて。 ・食べることでおこった水俣病について。 ・水俣病事件を紙芝居（「水俣の紙芝居」絵：永井文明、文：村田浩一）で学ぶ。 ③自身の生い立ちと両親について

		・漁師だった祖父は、3年間苦しんで亡くなった。祖父は未認定、父は認定患者、母は医療手帳を持っていた。 ・4歳か5歳の時に、祖父にしてしまったことへの後悔が、今の仕事につながっている。 ・父は、自分と同じ思いをしている人がいないかと、話を聞く活動を始めた。 ・沢山の苦しんでいる人がいて、差別と偏見を恐れて声を上げられない状態。父は「失して水俣病」と表現した。 ・父は自主交渉、直接交渉を選び、チッソ工場正門前で座り込みを開始。父は水俣の人たちから大変な批判をあびた。 ・父に対する暴力や、家族への脅しや嫌がらせに、なぜ被害者がこんな思いをしないといけないのかと悔しかった。 ・父を信じて家族みんなで支え合った。父たちの闘いをたくさんの人が支えてくれていることを知った。 ・父たちの行動が、最後にはチッソを交渉の場に引き出し、補償協定書という形で身を結んだ。 ・父は、文集に「熱意とは事ある毎に意思を表明すること」という言葉を残している。 ③質疑応答

６．成果と課題

（１）生徒の実感からの実践の評価

事後アンケートの質問１～４結果を表１に示した。

表１　事後アンケート質問１～４の回答結果

	質問内容	すごく思う	まあまあ思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない
1	水俣の学習に、積極的に参加して考えることができたと思いますか？	37 (32)	67 (59)	9 (8)	1 (1)	0 (0)
2	水俣で起きた偏見や差別は、身近にも起きている問題だと思いますか？	39 (34)	47 (41)	19 (17)	9 (8)	0 (0)
3	水俣の学習を通して、自分でも社会を変えることができると思いましたか？	12 (10)	48 (42)	46 (40)	7 (6)	2 (2)
		よくできた	まあまあできた	どちらとも言えない	あまりできていない	まったくできていない
4	水俣のために生きる人の話を聞いて、地域に生きることの意味を考えることができましたか？	37 (32)	57 (50)	16 (14)	5 (4)	0 (0)

※上段の数値は人数を、下段の数値は％を表している。　　質問1，2（n=114），質問3，4（n=115）

質問１では、91％が肯定的な回答をした。従って、生徒は本実践の学習への参画意識は高かったことが示された。質問２では、75％が肯定的な回答をした。多くの生徒が、身近な問題として自分に引き寄せて、水俣の問題を考えることができたと推察される。しかし、質問の意味を公害被害による偏見や差別と捉えた生徒も少なからず存在した可能性があり、肯定的な回答の割合がやや少なかったものと考える。質問３では、52％が肯定的な回答をし、40％は、「どちらとも言えない」と回答している。これは、中学生という立場で、具体的に何ができるかという点や社会を変えるイメージが湧かなかったことが要因であると推察される。質問４では、82％が肯定的な回答をした。これは、様々な立場で地域に暮らす人と出会い、その生き方や語り、地域との向き合い方から学ぶことで、具体的なイメージを掴むことができたことを示していると考える。

（２）生徒の学習内容の受け止めに関する分析と評価

質問５の回答から、生徒の学習内容の受け止めをもとに、働かせたＥＳＤの視点（見方・考え方）について分析する。表２に、質問５の回答結果を示した。

質問５に対して、68％が「ある」と回答した。「ある」と回答した生徒の理由記述には、多様な内容がみられ、表２のように、５つの項目に大別した。最も多いのは、「身近な差別・偏見・問題」に関する記述であった。水俣の問題は、生徒にとって日常に存在する差別や偏見と結びつけやすい問題であることが改めて示された。これは、質問２の回答傾向と矛盾しない。

次に、「真実を見ること」は、その記述内容から、固定概念や先入観で物事を見ることの弊害や、知らないことで起きる差別・偏見への気づきに関する記述である。特に、自分が「知らない」という前提に立っ

表２　事後アンケート質問５の回答結果

質問５　水俣の学習で、自分ごととして受け止められた話や内容がありましたか？「ある」と答えた人は、内容を具体的に答えてください。					（ n=114 ）
回答	内訳	項目	内容	内訳	記述例
ある	68%	身近な差別・偏見・問題	コロナ、SNS のいじめ、人種間、自分の持つ差別意識	35%	・差別をしてはいけないこと。症状よりも差別のほうが辛かったと聞いたので、水俣病だけでなく、差別はよくないと思った。 ・差別のことで、今でもコロナ差別とかあると思うから、しかも、これからの世の中をつくっていくのは自分たちだと思うし、自分の考え方や意識の仕方とかで差別とかを減らしていけると思うから。 ・差別意識があったため、水俣病であることを打ち明けられないというのは、私たちそれぞれも抱えていることだと思います。
		真実を見ること	ありのままを見る、良い面も見る、知らないことで生まれる差別	23%	・目前にある情報を鵜呑みにせずに、真実を追い求めること。その場にいる人にしか分からないことがあること。その人の世界に触れることで、新しいものが見えてくること。先入観で見ずに、ただひたすら見つめていくことが大切であること。 ・水俣といえば公害といった悪い側面だけを知り、固定概念だけで決めつけるのではなく、良い側面も知っていかないといけないこと。 ・永野さんやアイリーンさんの話でもあったように、水俣病に対してわからないことがあるから差別や偏見がある。だから、伝えられることを多くの人にできるだけ伝えられるようにしようと思った。
		社会のつながり、世代を超えたつながり	過去の恩恵、しわ寄せ、後の世代	14%	・恩恵の話。どれだけそれによって辛い思いをした人がいても、私たちはそのおかげで今、豊かな生活ができていること。やはりそこまで自分事として受け止められていないかもしれない。 ・誰かが良いとこどりをして、誰かが犠牲になる、という部分。今の環境問題にもつながると思った。 ・今していることのいいところだけとって、悪いところはもしかしたら後の世代に回しているかもしれないと思った。
		行動することの大切さ	声を上げる、伝える、動く	13%	・勇気のある行動が解決につながるということ。 ・間違っていることには、しっかりと大きな声で気持ちや正しい道を伝えるということ。
		その他	人との関わり方、水俣病の症状、今も続く水俣病など	14%	・永野さんのお話を聞いて、簡単に言葉をかけると相手の気分を害してしまうこともあると知って、きちんと相手の立場になって考えてみることが大事だと思った。 ・未だに水俣病として認定されず苦しんでいる人がいると聞いたときに、その人たちは私と同じ国民なのに、自由を奪われている気がしてならない。認定されたところで、彼らの身体の自由は戻らないが、少しでも彼らが楽になれるように（楽というのはニュアンスが違うが）、私たちにできることがないか考えたいと思った。
ない	32%	―	―	―	―

た気づきが見られた。

また、「社会のつながり、世代を超えたつながり」は、その記述内容から、社会的な構図や過去の人々の営みと自身のつながりへの気づきが見られた。さらに、「行動することの大切さ」は、その記述内容から、声を上げることの大切さや行動化することの大切さへの気づきが見られた。これらは、講演した講師の語りから、それぞれの生徒なりの気づきとして現れている。従って、多面的に水俣を知ることによって、多様な気づきが生まれ、特に「真実を見ること」では、知らない自分への気づきといった、いわゆるメタ認知が促されたのではないかと考える。

これらの分析から、記述には、相互性や公平性、責任性に関する気づきが含まれており、本学習でねらいとしていたＥＳＤの視点（見方・考え方）を働かせたと推察される。

（３）生徒の変容に関する分析と評価

生徒のＥＳＤの価値観や、行動化につながる生き方の変容について分析するために、質問６を設定した。表３に、質問６の回答結果を示した。質問６に対して、80%が「ある」と回答した。この結果から、一定程度生徒の考え方や生き方に変容をもたらしたと認められる。

「ある」と回答した生徒の理由記述を、表３の３つに大別した。「①知る」には、物事を一面で捉えるのではなく、多面的に捉え、深く知ることに関する内容が見られた。これは、知らない自分への気づきを

表３　事後アンケート質問６の回答結果

質問６　水俣の学習で、今の自分の考え方や生き方で変えていきたいと思う部分がありましたか？「ある」と答えた人は理由を答えてください。					（ n=114 ）
回答	内訳	項目	内容	内訳	記述例
ある	80%	①知る	偏見・差別はいけない、多面的に知る、深く知る、常識を疑う	53%	・１つの意見や考えだけを信じたり、表に出てることだけを信じないようにしないといけないと思った。真実がどうか分からないものを広めないようにしないといけないと思った。 ・誰かの話を聞くだけで満足するだけでなく、ありのままのことについてしっかり見るということは大切なことだと思ったから。情報を受けていれば大丈夫だと思うところが私にはあったから。 ・良い思いをする人、犠牲になる人の両方がいることを、当たり前と思わない。
		②他人事ではない気づき	他人事→自分事、自分と過去・未来とのつながり	11%	・いろんな病や差別にあっている人のことを知っていても、他人事で流しがちになってしまうところ。 ・後の世代が苦しまないよう、自分の行動のせいで不平な人がいないようにしなければならないと思った。
		③自分の生き方・他者との関わり	姿勢、伝える、他者との関わり方	36%	・「何もできない」「分からない」ではなく、「何ができるか」と積極的に考えていくべきだと思った。受動的な考えから、能動的な考えに切り替えたい。 ・これから伝える側になっていくので、相手にどうやって伝わるかということを考えるのが大事だと思った。 ・恨むという対立的な立場を取らず、歩み寄るという意見は、決して水俣だけでなく、友達など人との関わり方に大きく関わると思うから。 ・私は結構色々なものに対して偏見をもったり、相手はこう思っているだろうと極端に考えてしまったりするので、少しずつなおしていきたいと思った。でも、まだまだどうなおせばいいのか分からないので、人との関わりから新しい考えを見出していきたい。
ない	20%	―	―	―	―

省察し、変えていこうとする内容になっており、「批判的に考える力」、「多面的・総合的に考える力」を働かせたと考える。

次に、「②他人事ではない気づき」には、自身の行動の他者への影響を時間的・空間的に広く捉え始めている内容や、他人事にしている自分への客観的気づきの内容が見られた。これは、「①知る」と比較すると、自己だけではなく他者との関係性の中で省察し、変えていこうとする内容になっており、ＥＳＤで育てたい資質・能力である「批判的に考える力」、「多面的・総合的に考える力」を働かせ、「つながりを尊重する態度」の現れであると考える。

さらに、「③自分の生き方・他者との関わり」には、具体的に自分にできることを模索する内容や、人との関わり方を変えようとする内容、自分を客観視して変容を図ろうとする内容が見られた。これは、「①知る」や「②他人事ではない気づき」と比較すると、変えていこうとする内容がより具体的になっており、「批判的に考える力」、「多面的・総合的に考える力」を働かせ、「進んで参加する態度」の表れであると考える。

これらの分析から、多くの生徒が本実践の学びによって、少なくとも自分の考え方や生き方を変えようとするレベルで自分事化が図られたと考える。また、これらの記述は、「人権・文化の尊重」、「世代内・世代間の公正」、「自然環境や生態系保全を重視する」といったＥＳＤの価値観に関する記述であり、個別差があるものの、ねらいとする価値観の変容を促すことに一定寄与したものと考える。

（４）本実践の課題

・変容のレベルが生徒によって異なり、行動化の入り口に立てた生徒が一部にとどまったこと。
・各コースで学んだことや考えたことをシェアする機会の設定ができていなかったこと。
・現地を訪問できなかったことによって、出会う人と空間を共有できていないこと。

参考文献

1)永野三智（2018），みなやっとの思いで坂をのぼる　水俣病患者相談のいま，ころから
2)原田正純（1972），水俣病，岩波新書
3)原田正純（1985），水俣病は終わっていない，岩波新書
4)原田正純（2007），豊かさと棄民たち　水俣学事始め，岩波書店
5)吉田寛・市橋由彬ほか(2020),「「ひとに出会う」を通して学ぶ ESD の価値実現の教育実践の構想 II-ESD の価値観の根っこに迫る「総合的な学習の時間」の具体化に向けて-」， 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要，第 6 号，pp. 257-264.
6)吉本哲郎（2008），地元学をはじめよう，岩波書店